

久金属の創業

久金属工業はウイスキー・ワイン・清酒などのガラス瓶に使われる金属製キャップをはじめ、医療用ガラス容器のキャップ、調味料のキャップ・容器など、日常生活に欠かせない製品をつくっています。当地に本社をおいて、東京支店、滋賀工場があります。

創業は大正4(1915)年4月8日、浪速区桜川で、久庄次郎によります。庄次郎は明治19(1886)年、大阪生まれ、11歳から当時南区三島町にあった製罐工場の中野工業所に勤務し、弱冠28歳で久製作所を立ち上げました。当初の工場は二階建ての民家でしたが、大正8(1919)年には西区南堀江下通へ移転、同14(1925)年には浪速区小田町に工場を増設し、昭和9(1934)年7月に現在の西成区北津守へ移ってきました。

木津川下流の左岸部にあたる津守は、江戸時代中頃に開発された津守新田で、近代以降、明治29(1896)年に東洋紡織(現ユニチカ)、明治44(1911)年に佐野安船渠などといった工場が進出してきました。久金属敷地の北側には写植機メーカーとして著名なモリサワの工場もありました。また、敷地西側を走る南海汐見橋線(当初は高野鉄道)は明治33(1900)年に開通しています。

移転直後の9月には室戸台風が襲い、工場・社屋が浸水するなどの被害がありましたが、新築間もなかったことから大きな損害は受けず、昭和12(1937)年には現在の事務所棟や第三工場を増築するなど、会社の規模は拡大していきました。

太平洋戦争の空襲では近接する小学校が焼失するなどの被害がありましたが、久金属の敷地内はそれを免れ、昭和初期に建築された建物が群として残っています。



東門袖に残る旧社名銅板プレート(昭和9年)

久金属の建物群

一般に工場建築は老朽化すれば建替えられてしまうことが多いのですが、ここでは昭和9年に移転して、同12年に増築したときの建築を見ることができます。それが工場や事務所だけでなく、門・守衛室・倉庫・社長室などがまとまって存在しているところが注目され、映画のセットのなかにいるような印象を与えてくれます。設計者についてはわかりませんが、施工者は山尾組であったと伝えられています。木材の調達には、創業者・久庄次郎の実兄で樽の呑口などの製造販売をしていた西村卯兵衛が関わったといえます。

久金属工業の文化財建造物については同社のホームページwww.hisakinzoku.co.jp/でもご覧いただけます。



久金属工業本社全景(令和2年)

国登録有形文化財答申

久金属工業建物群

HISA KINZOKU KOGYO CO., LTD.

所在地 大阪府大阪市西成区北津守三丁目8番31号
所有者 合名会社ヒサ・コーポレーション
答申日 令和2(2020)年7月17日

- 登録基準(一)国土の歴史的景観に寄与しているもの
- 事務所 — 昭和12年(1937)
 - 旧社長室 — 昭和12年(1937)頃/令和元年(2019)改修
 - 品質管理室 — 昭和12年(1937)頃/令和元年(2019)改修
 - 技術室 — 昭和9年(1934)
 - 守衛室 — 昭和12年(1937)頃
 - 旧第一工場 — 昭和9年(1934)
 - 旧倉庫 — 昭和9年(1934)頃/昭和12年(1937)頃改修
 - 旧防空壕 — 昭和9年(1934)頃/昭和42年(1967)頃改修
 - 正門 — 昭和12年(1937)頃

以上9件



移転前の北津守(昭和4年修正実測図)



令和2年度日本博主催・共催型プロジェクト

大阪市教育委員会・全国近代化遺産活用連絡協議会・文化庁・独立行政法人日本芸術文化振興会主催
「西成区に残る戦前の工場建築を訪ねる—久金属工業—」資料

発行日 — 令和2年10月17日
編集・発行 — 大阪市教育委員会

この資料は令和2年度日本博「日本の近代化遺産」の事業経費の一部より作成しました。



正門

(昭和12年頃 鉄筋コンクリート造)

柱頭に楕円形の底を載せたモダンなデザインで、格子状になったブロンズ製の照明枠には中央に「久」の字をアレンジした久金属のマークがある。



旧第一工場

(昭和9年 木造平屋建 鉄板葺(もとは瓦葺))

越屋根^{※4}付きの切妻造。正面12.7m、側面24.3mという大空間を南北中軸線に配した4本の鉄骨補強柱が支える。これは5寸角の木柱の周囲を鉄骨で包み、リベット留めたもので、上部に取り付けた鉄骨方杖の補強材とともに梁材を受ける。下屋根はトラス、越屋根は和小屋でつくられる。越屋根部分に引違いのガラス窓を設け採光と換気に配慮している。



品質管理室

(右) (昭和12年頃 木造平屋建 金属板葺)

旧社長室

(左) (昭和12年頃 木造平屋建 金属板葺)

品質管理室は、半切妻造^{※5}の屋根と外壁の下見板張りがモダンな印象を与える。窓には三角板を持送りとした庇がつく。両妻側の中央上部に高窓(たかまど)があることから、当初は天井が張られていなかったとみられる。

旧社長室は、品質管理室の北側に壁を共有して建つ。内部が西の社長室、東の食堂とに分けられる。社長室は六畳ほどの広さがあり、外壁は茶褐色のスクラッチタイル貼り、腰に長方形の鉄平石(板状に割れる性質をもつ輝石安山岩)を貼る。正面中央にガラス欄間付きの両開き木製ガラス戸、両脇に2本の縦棧の入った上げ下げ窓が入り、その上部にスペイン瓦^{※6}を用いた小庇が廻らされる。内部は腰を縦板張り、壁と天井を寒水石(白色石灰石)モルタル掻き落としとする。天井を台形に折り上げてモダンなつくりとしている。正面壁にある柱時計はタイムレコーダー(SEIKOSHA 1930年製「勤退記録時計」)でもあり、神棚が化粧枠内に組み込まれている。

旧社長室



旧倉庫

(左) (昭和9年頃 木造2階建 鉄板葺(もとは瓦葺))

守衛室

(右奥) (昭和12年頃 木造平屋建 鉄板葺)

旧倉庫は、道路に面した北面が切妻造、南側が越屋根付きの切妻となる。外壁は北面の裾を石張りにして重厚感を出す。南面は窓上部まで下見板張りとし軽快につくる。もとは原材料倉庫として使われており、2階にはそのときの木製作り付け棚が残る。屋根裏は旧第一工場と異なり完全な和小屋である。

守衛室は、外壁をドイツ下見板張り^{※7}とし、北側に半円形の窓、東側に上部両サイドにカーブを付けた横長窓をもつ瀟洒な建物。南側に出入口があり、内部は畳敷で東窓側にカウンター、その下に小物入れをつくる。



守衛室



技術室応接間天井

技術室

(昭和9年 木造2階建 瓦葺)

入母屋造の東西棟。工場建築当初の事務所棟で、入口正面に1枚板の受付カウンターを設ける。その奥を執務空間とし、格天井とする。北東隅に床を1段高くして四畳半程度の応接間が設けられる。その天井はラテルネンデッケ^{※8}状につくられている。2階は創業者の居宅として使われ、神棚や仏壇を備えた座敷がある。2階軒廻りは、軒裏に2段の蛇腹を廻らせた出桁造りで、漆喰で塗り込めて防火仕様にする。



事務所

(昭和12年 木造2階建 瓦葺)

東西棟と南北棟からなる。東西棟は外壁が二丁掛タイル^{※1}貼りで、木製窓枠や手摺のデザインが特徴的である。北面の化粧庇にフランス瓦^{※2}を使用する。2階応接室では床をリノリウム^{※3}敷、腰壁をマーブル模様の化粧板、天井を格天井とする。また2階会議室は壁の天井際に漆喰で彫形装飾を付け、北面にある2つの窓の間に神棚を作り付ける。球形の照明器具や扇風機は竣工当時のもの。南北棟は1階を会議室、2階を倉庫とする。

旧防空壕

(昭和9年頃 鉄筋コンクリート造平屋建)

南側を正面とし、その左右に出入口がある。昭和42年に便所として改修され、地下壕は浄化槽とされた。北側はカモフラージュのためか築山となり、その上部に擬木仕上げされた2本の通気口が残る。



用語解説

- ※1【二丁掛タイル】レンガの長手面と同じサイズのタイル。小口面サイズのものは小口平と呼ぶ。
- ※2【フランス瓦】平たい同一形状の瓦を噛み合わせるように葺く。
- ※3【リノリウム】酸化させた亜麻仁油に天然樹脂を加え、コルク粉等を混ぜてから麻布に塗布してつくられる床材。難燃性で弾力性に富む。1863年にイギリスで発明された。
- ※4【越屋根】棟上部に設けた小屋根。
- ※5【半切妻】切妻屋根の妻側上部を折って傾斜させたもの。
- ※6【スペイン瓦】上丸瓦と下丸瓦を交互に組み合わせて葺くが、それらを合体させたものも多い。大正時代以降、モダンな住宅建築に多用された。
- ※7【ドイツ下見板張り】横張り羽目板の一形式で、板の表面が垂直になるよう、重なり合う部分に削り込みを入れている。
- ※8【ラテルネンデッケ】隅三角状持送り天井。角の板材を45度ずらして天井中央を組み上げたもの。